

奇跡の芸能

舞踊劇「綾子舞物語」ができるまで

堀井真吾



櫻井市長が、公演後の記念写真撮影時に、隣から話しかけて下さった。「お会いしたのは、ちょうど3年前でしたね・・・」3年前の10月中旬。直接お会いして、舞踊劇「綾子舞物語」上演の提案をしたのは、その時が最初だった。

むろん、簡単に決まるような事案ではない。ただ、台本を読んで臨んでくださった市長は、その会談で心を動かされていたように思う。もともと、早稲田大学のご出身。綾

子舞を研究し、国の重要無形民俗文化財に推された、故本田安次先生のこともご存じの方だ。綾子舞については、もとより造詣が深い。

その後、舞踊劇「綾子舞物語」上演実現までの道のりは、紆余曲折、山あり、谷あり、いつ到達できるのかと思うほどに、遠く長かった。うまく表現ができるかどうか疑わしいが、今後の綾子舞伝承と発展のお役に立てればとの思いで、書き出してみたいと思う。

能楽堂での綾子舞

2018年7月、東京千駄ヶ谷の国立能楽堂で、能「柏崎」と、綾子舞が上演されるといふ。「柏崎」と言えは、民俗芸能の「綾子舞」の伝承の地・・・ということ、上演が決まったのかどうかは定かでないが、とにかく、格調高い国立能楽堂で「綾子舞」が上演されるというので、必ず観に行こうと決意していた。

舞台には、幼なじみの二人が出演していることもあって、彼らとも会いたいと考えていたのだ。

彼らの芸は見事だった。特に声の張り艶は素人離れしたものを感ぜた。皆、仕事をしながら、綾子舞の伝承に精進しているのを感じ、頭の下がる思いだった。そして、優雅な踊り手の舞に、うっとりさせられたのはもちろんだ。

公演後、幼なじみとも旧交を温め、現場で会った友人たちと楽しく談笑しながら帰路についていた。その途中で、何とはなく言葉にしたのが、「綾子舞を芝居にして、書いてみようか・・・」声に出して言ったことは、簡単に引込まがつかない。帰ってから、綾子舞関連の書物をつらつら読み始めた。

その過程で、綾子舞座元のコラボレーションができること面白く、舞踊劇として、芝居の中に踊りを組み入れながら進行すること等、実際に構想が浮かび始めてきた。夢中で関連資料や本を読み、その後、台本に着手した。

その中で、いくつもの発見もあり、益々綾子舞に深い興味を持つことになった。

菊の会と畑先生

なぜ、自分は芸能の道に進んだのか・・・若い頃は、ただ必死で何も考えずに突き進んでいたが、そんな中でも、なぜか「綾子舞」のことは常に心に引っかかっていた。自分の体の奥に流れるリズムのようなものは、明らかに「和の世界」であることに気がついてきたからだ。

綾子舞が国の重要無形民俗文化財に指定されたのが、学生の頃。芝居を始めた頃には、様々な舞踊団やグループで取り上げられ踊られていたの、気になって良く足を運んだ。なぜか誇らしかった。

そんな中で「舞踊集 団 菊の会」畑道代さんとの出会い。35歳頃だったと思う。役者として、

少しばかり形になり始めた頃。民俗芸能学者の三隅治雄先生が脚本・演出。阿波踊りをテーマにした舞踊劇のヒロインの恋人役に選ばれたのだ。

その直前に、菊の会は京都南座で、「お国歌舞伎」という舞踊劇を上演したばかりだった。そのオーブンニングは、なんと「綾子舞」。畑先生自ら何度か鶴川に足を運ばれ、当時の指導者、布施富治さんより綾子舞を習ったという。また、三隅先生は、本田先生とともに、戦後、鶴川に通い綾子舞を研究。「綾子舞」を世に出していただいた恩人の一人だ。

不思議なことに、そのお二人のもとに、鶴川生まれの私に加わり、舞台で共演することになったのだ。そして、その出会いは決定的となり、今回の舞踊劇「綾子舞物語」に繋がる。縁とは、実に不思議なものである。残念ながら、畑道代先生はお亡くなりになり、今は畑聡氏が二代目代表になっている。「綾子舞物語」の振付は、畑聡代表である。つまり、舞踊集団「菊の会」無くして、本公演はあり得なかつた。

8年間ほど、度々呼ばれて、菊の会の舞踊劇に出演したが、スタッフには畑先生のこだわりで、一流の方々が揃っていた。中に、新派の初代、水谷八重子などのメイキャップを担当されていたベテランの男性アーティストがいた。その方に公演の休憩中、こんなことを言われた。「綾子舞はね、天皇家の踊りだよ・・・」

意味がよくわからずに聞いていたが、その一言だけは、妙に胸に残った。かと言って、額面通りに受け取ったわけでは無い。ただ、文化人たちが認める価値の高い踊りであることだけは、なんとなくわかった。

「綾子舞」は、私の心

の中で、少しずつふくらみ始めていた。

「天皇家の踊り」

「綾子舞物語」を創作したのが60歳。畑道代先生の相手役をやらせていただいた最後が43・44歳頃だったか。綾子舞に再びたどり着くまで、随分と時間を要したものだ。

資料を読み、台本を書く。直す。専門家から話をうかがう。書き直す。その繰り返しで何とか、少しずつ納得のいく台本に仕上がっていった。

そんな中、いくつもの発見もあった。あの時のメイクの師匠の言葉・・・。実は、小笠原恭子著「出雲のおくに」その時代と芸能(中公新書)の中に、「京都御所で、正親町天皇の御前で10歳のお国と7歳のお菊姉妹が、踊った」とある。それは、「ややおどおり」と言われ絶賛を博し、貴族たちから庇護された。その「ややおどおり」こそが、綾子舞の前身だ、というのだ。真実かどうか断定はできないが、大きな説として成り立っているのは確かだ。

「綾子舞はね、天皇家の踊りだよ。」それは、このことを指して言った言葉だったことが、初めて理解できた。飛躍した言い方ではあるが、その説に沿って考えれば、まんざら遠い話ではない。

綾子舞物語の舞台は、その20年後、お国とお菊の姉妹が、関ヶ原の合戦を逃れて、放浪の旅に出る。佐渡に向かう途次、越後の鶴川の里に逗留して物語が展開する。ここからは明らかに私の想像の世界である。

そう言えは、平成15年、南中学校に、天皇皇后陛下がお見えになり、綾子舞を鑑賞された。令和となった一昨年は、新潟市で、天皇皇后両陛下の前で、小切子踊が披露された。確かに、「綾子舞」は天皇家と縁のある芸能なのかもしれない。

そして、鶴川が江戸時